

ディアスポラ状況における政治参加と「共同体」の再編： ロサンゼルス出身者の事例を基に

椿原敦子
人間科学研究科 博士後期課程

1. 問題の所在

本調査は、ディアスポラ状態にある人々を祖国の政治へと駆り立てるものは何か、居住地における日常生活や過去の経験と政治参加がいかに関結しているかを考察するものである。

【背景】2009年6月12日イラン大統領選挙実施。アフマディネジャード大統領選出。イラン国内外では不正を指摘し、選挙のやり直しを求める声が高まる。イランでは路上で抗議する市民と警察との衝突が激化し死傷者が出た。LAでも選挙直後から抗議活動が行われ、最も多い時で数千人規模のデモへと発展。

(1)過去の経験（革命、戦争等々）が現在の行動にどのように反映されているか：人々が政治的行動を起こす契機を、個人的な経験に辿る。特にこれまでの調査で見られた「内面化された恐怖」と関わる経験に着目する。

(2)場所と帰属の感覚の変化：亡命者とは異なり、イランとアメリカを往来できる人々にとって、あちら側とこちら側という二項対立では捉えられない帰属意識の中でイランの政治に関することの意味を考える

(3)前回の調査でデモという運動の舞台に立つ人々の様子を考察したが、その人々の日常生活や個人史については十分に触れることができなかった。今回は前回の調査で知己を得た人々を中心に個人史の聞き取りを行う

2. 調査概要

調査期間：2010年2月6日から2月26日

調査地：アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス市

*計画ではオレンジ郡アーバイン市でも調査を実施する予定だったが、ロサンゼルス市での調査の重要性を考慮し、また調査期間も限られていたため実施せず

調査方法：

- ・デモや政治集会の参与観察
- ・インタビューの実施

3. 調査期間中に取材した主なデモ・集会

4. 前回の調査(2009.9-10月)からの変化

前回：「私たちは一つになった」

- ・「亡命者」の運動のスタンダード化：革命以前のイラン国旗(Shir-o-Khorshid)を掲げ、体制転覆を目標とする
- ・かつて対立していた派閥同士の歩み寄り

↓

今回：分裂？

- ・連邦ビル前で毎晩行われているデモは 10 人程度から 2-5 人程度に。Shir-o-Khorshid の旗を掲げる人がなくなった
- ・革命記念日のデモでは、通りを隔てて異なる派閥の人々が集まり、時折小競り合いが見られた

5. デモの様子（映像）

6. インタビューから

- (1)イラン革命の経験
- (2)イランとの連続／不連続
- (3)Coalition と Communitas

7. 考察と課題：結論に代えて

- ・ディアスポラ状況における政治参加：「遠隔地ナショナリスト」[アンダーソン 1993]か「新しい社会運動」か？
- ・組織形態の「イラン的」側面：一人が複数の組織に関わる、複数の組織が一つに統合される、ある組織が人によっては別の名で呼ばれるということがしばしば見られる（cf. Beeman 1986, Loeb 1977）
- ・経験・記憶における自他の境界の曖昧さ：個人的な恐怖や経験が現在のイランの人々への共感へ、政治参加へと直線的につながるわけではない。メディアや伝聞情報を通じて得た情報も含めて、政治参加の過程でどのような経験、記憶を「選び取って」いるかに着目し、考察する必要性

参考文献：

- アンダーソン、ベネディクト 1993(1992)「〈遠隔地ナショナリズム〉の出現」関根政美訳、世界 1993 年 9 月号、pp.179-190.
- 曾良中清司他編、2004『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂.
- Beeman, William O. 1986 *Language, Status and Power in Iran*. Indiana University Press.
- Loeb, Lawrence. 1977 *Outcaste: Jewish life in Southern Iran*. Gordon & Breach Science.
- ターナー、ヴィクター 1976 『儀礼の過程』富蔵光雄訳、思案社.